ザ・プロフェッショナル

The Professional file.02

天ケ瀬ダムで今、環境を守りつつ
地域の生活を支えるための大工事が進行中だ。
一つのゴールを目指す若きプロフェッショナルの手によって、
一歩一歩、確実に形になりつつある。

右から
（株）大林組 **宮内 賢治さん**
鹿島建設（株） **松井 貴志さん**
大成建設（株） **松本 侑士さん**

自然と真っ向勝負。現場は水との戦いの最前線

宇治川の氾濫防止、地域の生活利便性向上などのために行われている天ケ瀬ダム再開発事業。今回新たにトンネルを整備するという大規模工事にあたり、多数の協力会社が各部位の重要工事を担っている。

自然と真正面から対峙する大工事は、いわば水との戦いだ。戦いの最前線を担う現場では、入社間もないルーキーたちが奮闘する姿が見られる。今回、3人の若き技術者の横顔をのぞいた。

トンネル放流設備の入口に位置する流入部。松本さんは、「実は入社してこの現場に来るまで、天ケ瀬ダムの存在すら知りませんでした。大先輩たちがつくり上げた築50年のダムに、自分も関わることができてうれしいです」と語る。ダムをやるなら水上の工事がしたいと思った。湖上の桟橋や船を使ったダムならではの作業にとても興味をひかれたからだという。「水上と地上で協力し合って行うのですが、連携がうまくいき、どんどんそれらしい形になっていくのが面白いんです」。

地中深く掘られた巨大な立坑から、これまた巨大な水路トンネルが伸びる。ゲート室部の松井さんは、工事の進捗を確認しながら、常にその次、その次の段取りを考えている。大学で構造工学を専攻し、ものづくりの世界に飛び込んだ。最初の仕事が天ケ瀬ダムだ。

「いついつまでに何をやるか、その段取りなどは図面から読み取ります。こんなに大きなものが、想像した通りにでき上がっていくのは感動的です」と松井さんは言う。測量時など、初めの段階のちょっとした手違いが後々の工事に影響を及ぼすという手痛い失敗も経験した。現場では叱られ、作業員にも大きな迷惑をかけることになり、大反省だったという。

「掘削には機械がたくさん使われるのでさまざまな電気設備が必要なのですが、私自身がまだよく知らないものだから、日々自分のいたらなさを実感しています。また、職長さんや職人さんなど大勢の人の前で話さないといけないんですが、こんなにも人前で話すことが多い仕事だとは思ってもみませんでした。いつも緊張しています」と笑うのは減勢池部の宮内さん。

大きなものづくりの現場に魅了される3人

一体、この仕事の何が彼らを魅了しているのだろうか？

「建設に関わる仕事はいろいろとありますが、最も近くで見ていられるのが現場です。現場は迫力がある。苦労も達成感も全部ダイレクトに手ごたえとして返ってくるんです」（松本さん）。

「私の考え方は至極単純。『同じものづくりをするなら、でかいものをつくるほうがかっこええやん！』っていう（笑）」（松井さん）。

「普通なら入れないような場所に入れるのは楽しいです。冒険心がくすぐられるというか……。何人もが一つのチームとなってゴールを目指すところも素敵だと思います」（宮内さん）。

会社や工区は違えど、3人は「永く地域に資するダムにするため、無事に工事を完遂する」という志は同じ。文字通り「チーム天ケ瀬ダム」の同志たる、若きプロフェッショナルたちなのだ。

工事完遂を目指す志はみな同じ「チーム天ケ瀬ダム」！

松本侑士さん
大成建設（株）、2013年入社
ダム湖の側面に掘られるトンネルの入口部分で湖底を掘削する「流入部」の工事を担当。最新技術を使って湖上の台船から鋼管を打ち込む。

松井貴志さん
鹿島建設（株）、2013年入社
放流量を調節するゲートがある「ゲート室部」。内径約26mの立坑を掘り、立坑から流入部に向けて直径約10m、全長約320mのトンネルを構築する。

宮内賢治さん
（株）大林組、2014年入社
放流水の勢いを抑制するための施設「減勢池部」担当。日本最大級の水路トンネルを建設する。掘削に必要な電気設備を管理し、指示、施工を行う。